

「ペルシア語文化圏の歴史と社会」 2008年度第1回研究会

「美術からみたペルシア語文化圏」

日時：2008年6月29日（日）

会場：AA研マルチメディア会議室(304)

内容：

1. 阿部克彦（AA研共同研究員・神奈川大学）

「サファヴィー朝装飾美術様式のインドへの伝播——染織意匠を中心として」

2. 小林一枝（早稲田大学）

「いわゆる『ペルシア・ミニアチュール』の成立とその伝播」

=====
今回は、美術からみたペルシア語文化圏ということで、文字資料を離れて美術の面に関係する諸地域がどのような関係にあるかという点を議論することとなった。写本に付随するものとして伝播した細密画が、ペルシア語文化圏の各地で流行したことは、ある意味当然ではあるが、小林報告においては、イスラーム美術史全体のなかでペルシア細密画の誕生から各地への伝播への歴史と、各地域の特徴が示された。これに対して、染色意匠の場合にはより実証が困難であるが、少なくとも近世イランとインドの意匠の共通性は明らかとなった。「ペルシア語文化圏」という名称が適当であるかどうかは別として、これらの地域が美術の分野においても密接な関係にあることが明らかとなった（近藤信彰）

サファヴィー朝装飾美術様式のインドへの伝播——染織意匠を中心として

阿部克彦

本発表では、美術・文化交流史の観点から、アッバース一世以降のサファヴィー朝の下で発達した染織美術、特に絹織物を、インドのムガル朝及びデカンの諸王国との関係のなかで捉え直すことで、現在のサファヴィー朝染織史研究におけるいくつかの問題点を明らかにし、その考察を試みようとするものである。

第一の問題点としては、現存する絹織物のなかで、記銘のある作品は数少なく、そのほとんどは織職人あるいはデザイナーの名前のみが織り出されているため、作品の年代比定

が困難なことである。ところが多くの場合、画家が絹織物の下絵を提供したことが知られており、制作年の確定している絵画作品から、織物の年代を推定する方法が考えられる。しかし、写本制作を主とする画家が、複雑な工程を必要とする機織りに必要な下絵制作を担当したとは考えにくい。そのため絵画作品の年代と実際に絹織物が制作された年代が一致するとは限らない。しかも、同じデザインが、王朝が交代した後も繰り返し用いられる事もあった。

第二の問題点は、サファヴィー朝の絹織物の技術およびデザインが、文化的に深いつながりのあったインドのムガル朝やデカンのゴルコンダ王国などにも伝播していったことで、作品資料の産地に関しても明確な答えが得られない事である。この場合も、残された絵画資料が一つの手がかりとなる。年代の確定している絵画作品に描かれた衣類の描写から、そこに描かれた文様と装飾パターンを絹織物資料と比較するという方法によって、特定の年代または地域による差異を読み取る事が可能となる。

これらの課題は、サファヴィー朝染織研究において、作品の年代と産地という、基礎的な情報が多く不足していることを示している。今後は、本研究で得られた成果を、文献史料から得られる情報と合わせ、かつ絹織物の技術と作品の組織の分析を行う事によって、サファヴィー朝期の絹織物の実態を明らかにしたい。

いわゆる「ペルシア・ミニアチュール」の成立と伝播

小林 一枝

イスラーム世界のイラン、中央アジア、インド、トルコなどペルシア語が主たる文語として用いられた地域「ペルシア語文化圏」で制作されたミクロの絵画は、しばしば黄赤色の「顔料ミニウム」から派生した西洋世界の写本挿絵を示す「ミニアチュール」という用語でもって「ペルシア・ミニアチュール」と総称される。しかし、アラブ世界やトルコ世界でつくられた写本挿絵よりも遙かに多様性があるペルシア語文化圏の写本総合芸術は、パトロン、芸術家が属する民族や書写された言語、テキストの内容、絵画の様式も多岐にわたる。ササン朝が滅亡した7世紀から、イスラーム時代まで継続する「ペルシア的」と呼べる絵画伝統は、果たして存在したのであろうか。イスラーム時代のペルシア絵画、特に写本挿絵は、通常、イル・ハーン朝に始まり、ティームール朝・サファヴィー朝において最盛期に至りその後、伝統的絵画の終焉を迎えたとされる。また、盛期ペルシア写本挿

絵は、ムガル朝インドやオスマン朝トルコの宮廷様式にも色濃い影響を与えた。

バフラーム・ミールザー・アルバムに添えられたドゥースト・ムハンマドの序文（1544年）に見られる「書家画家列伝」には、当事の画家たちが認識していたペルシア絵画史が概観されている、その内容を詳細に検討していくと、ティームール朝・サファヴィー朝の様式は、イル・ハーン朝以後のジャラーイル朝宮廷の工房に1つのターニング・ポイントがあったようである。トゥルクメン諸王朝の様式などにも影響を受けながら、盛期の挿絵様式はティームール朝において成立するわけであるが、トプカプ宮殿図書館蔵の『宮廷画冊（サライ・アルバム）』に残された極彩色や淡彩の挿絵、デザイン画を再検討することによって、その成立過程が垣間見えてくる。また、『宮廷画冊（サライ・アルバム）』H.2153に残る上申書は、当時の宮廷工房の様子や画家の役割などの詳細を我々に教えてくれる。